

國學院大學學術情報リポジトリ

『三体』三部作における日本のイメージ

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 亞茹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000075

『三体』三部作における日本のイメージ

Imagery of Japan in the “Remembrance of Earth’s Past” trilogy

張 亞 茹

キーワード：『三体』三部作 日本 イメージ

Key Words: “Remembrance of Earth’s Past” trilogy Japan imagery

要旨

『三体』三部作は中国のSF作家劉慈欣が書いたシリーズ長編SF小説であり、その第一部『三体』の英訳版が第73回ヒューゴー賞長編小説部門賞を受賞した。この壮大な『三体』三部作において、全体として日本への目配りがかなり多いと指摘された。本論文はテキスト分析法により、『三体』三部作で直接描かれた日本のイメージとメタファーの視点からみた日本的要素という二つの側面から、日本的要素がいかに『三体』三部作に応用されているのかを分析した。さらに、そうしたイメージが作られた原因を、世界を題材とするSF創作意識、現実世界の影響、作者の想像力の乏しさという三つの点から究明した。

Abstract

The “Remembrance of Earth’s Past” trilogy is a series of epic science fiction novels written by Chinese author Liu Cixin. The English translation of the first book in the series, “The Three-Body Problem,” won the Best Novel award in the Long Form category at the 73rd Hugo Awards. It has been noted that there is a considerable amount of attention given to Japan throughout the grand “Remembrance of Earth’s Past” trilogy. This paper analyzes the application of Japanese elements in the trilogy from two perspectives: the Japanese elements seen from the direct portrayal of Japan’s image and metaphors in the trilogy, and the factors contributing to the creation of such imagery, including the consciousness of using the world as a subject in science fiction, real-world influences, and the author’s limited imagination.

はじめに

2015年8月23日、中国のSF作家劉慈欣が英訳版の『三体』で第73回ヒューゴー賞長編小説部門賞を受賞した。アジア人作家として初めてSF最大の賞であるヒューゴー賞を受賞したのは、「SFの歴史を塗り替える大事件」だと大森望氏

は評価した⁽¹⁾。それをきっかけに、劉慈欣が今もっとも注目されている作家の一人となり、復旦大学の嚴鋒教授が彼を「たった一人の力で中国のSF文学を世界一流レベルに押し上げた」と称えている⁽²⁾。

『三体』三部作は劉慈欣が2006年から連載し始めたシリーズ長編SF小説であり、中国国内のみならず20カ国以上で翻訳され、全世界で累計2900万部を超える化け物級のSFである。その日本語版も相次いで刊行され、版元の早川書房によると、2022年6月23日の時点で日本において『三体』三部作の販売部数は累計60万部を突破したとのことである。さらに、商業的な成功を収めただけでなく、「中国SFは百年前から蛇形を続けてきたが、『三体』はそれを本格的な文芸ジャンルとして再起動した」と文化史的に位置づけられる⁽³⁾。

『三体』三部作は地球人類文明と地球外文明との接触、生存の危機に直面している人類と地球の運命を描いているビッグ・スケールな物語である。この壮大な『三体』三部作においては、「全体として日本への目配りがかなり多い」と仲俣暁生氏が指摘している。さらに、彼は「中国の現代SFにとって、第二次世界大戦における日本軍の行動は創作に際して自在に利用できる、脱イデオロギー化されたデータベース素材となっている」と述べている⁽⁴⁾。

ところが、『三体』三部作を政治的な面から読み取った学者も多くいる。中国側の学者において、王瑤氏は最初に、劉慈欣が作った種族像は「グローバル化時代において、中国と他者の関係を想像して描いたもの」⁽⁵⁾と分析している。張未末氏は『三体』という作品を「中華民族の民族的物語」とし、「三体文明は日本文化に対するメタファー」⁽⁶⁾と主張している。李小葉氏は前人の見方を受け入れ、「三体文明は資本主義世界に隠喩され、地球文明は第三世界の中国に対応する」⁽⁷⁾という明らかな対応関係を述べている。一方、日本側の学者において、李小葉氏と同様に三体星人を「西側」のように捉える学者もいれば、「秩序立った「恒紀」と、太陽が無茶苦茶に現れる「乱紀」が交互にやってくる三体宇宙の世界自体が、非常

(1) 大森望. 文革の不条理が原点の中国SF——劉慈欣『三体』現象. 新潮, 116 (10).

(2) 嚴鋒. 追寻“造物主的活儿”——刘慈欣的科幻世界. 书城, 2009 (2).

(3) 福嶋亮大. 文化史における『三体』. 群像, 74 (11).

(4) 仲俣暁生. ナショナリズムを超えた人類愛の物語 劉慈欣『三体II 黑暗森林』(上・下). 出版人・広告人, 8 (8).

(5) 王瑤. 全球化時代の民族寓言——当代中国科幻中的文化政治. 中国比较文学, 100 (03).

(6) 張未末. 科幻式的异文化表达——《三体》的文学人类学解读. 美与时代 (下), 654 (05).

(7) 李小叶. 中国想象与未来视野: [硕士学位论文]. 海南大学, 2016年.

に中国的」⁽⁸⁾という学者もいる。さらに、須藤靖氏は三体文明の設定をよく理解した上で、「いずれにせよ、日本自身は今後の世界の安定状態の中核をなす存在にはなりえず、何らかの強い束縛状態の周りを衛星国家として生き延びるしかないのであろうか」⁽⁹⁾と嘆き、三体文明の境遇から無意識的に日本を連想したのではないだろうか。

こうした先行研究はいずれも『三体』三部作を中日の政治・歴史・文化に対する既存の印象に基づいて読み取るもので、客観的とは言えないだろう。そこで、本稿はテキスト分析法により、日本的要素がいかに関『三体』三部作に応用されているのかを考察し、その原因を究明したいと考える。

一、『三体』三部作で直接描かれた日本

『三体』三部作は人類全体を主人公にした壮大な物語であり、生存危機に直面している全人類の偉大なる抗争が描かれている。ここに登場した日本的要素が大きく二つの部分に分けられると考える。第一部分においては日本国、日本人、日本文化という『三体』三部作で直接的に描かれた日本のイメージを分析する。次の部分はメタファーという視点から日本的要素をアプローチする。

(一) 日本国のイメージ

本節では、『三体』三部作における日本国のイメージについて考察する。「三体危機」という三体文明は地球侵略を企んでいることが判明した際、日本が国際舞台に登場する場面を引用したものは以下の通りである。

(1) 第三回国連特別会議において、多くの発展途上国が、米、露、日、中、EU に対し技術公開を要求し、宇宙航行技術も含めたあらゆる先進技術を無償で国際社会に提供することを求めたのです。

(2) 「むしろシャーマンでしょう」日本代表が鼻で笑うように言った。日本はとうとう最後まで国連安保理の常任理事国にはなれなかったが、惑星防衛

(8) 富岡幸一郎、藤井聡、柴山桂太、浜崎洋介、川端祐一郎、「中華未来主義」文学座談会 現代中国の「想像力」を読む 劉慈欣『三体』をめぐる、表現者クライテリオン、(12)。

(9) 須藤靖、中国と三体世界——注文の多い雑文 その五十一、UP、49(9)。

理事会の設立と同時に常任理事国入りを果たしていた。

(劉慈欣『三体Ⅱ 黒暗森林』上50、51、304ページ)

三体人の侵略艦隊が刻一刻と地球に迫りつつあるという史上未曾有の危機に直面している人類は、空前の恐怖と絶望に陥ってしまった。そのような状況下で、彼らは共通紀元(西暦)から危機紀元へと紀年法を改め、惑星防衛理事会(PDC)を設立した。小説によると、国連特別会議において、惑星防衛理事会の常任理事国が共同で議事を進行し、国際社会のコンセンサスをまとめ、国際法を制定することを目的としている。さらに、危機紀元二年、国連惑星防衛理事会は面壁計画を策定し、その指揮および遂行を直轄する組織となる。つまり、惑星防衛理事会はかつての国連安全保障理事会のような存在で、地球を守るという重責を担っている。

日本が惑星防衛理事会の設立と同時に常任理事国入りを果たしていたということから、その国際的に発言権を持っている大国のイメージが見られる。実際、国際会議で積極的に発言する日本代表の姿が小説の中にもよく出てくる。また、日本は米、露、中、EUのような先進技術を持っている大国と肩を並べられる国であり、つまり、日本は国際的に発言権を持つ先進国と見られている。

(二) 日本人のイメージ

集団と個人という対立に対する選択により、『三体』三部作に登場した日本人が二種類に分けられると考える。まずは申玉菲と山杉恵子のように、集団のために自分の命を捧げることができるキャラクターである。申玉菲は中国系日本人の物理学者であり、その正体は地球三体協会(ETO)のメンバーである。地球三体協会は三体艦隊の受け入れ準備を秘密裡に進め、社会に不満を抱く地球人によって構成され、地球反乱軍とも言われている。彼女がその夫の魏成に近づき、そして彼と結婚したのは、魏成を利用して三体問題を解決するためであった。結局、申玉菲は地球三体協会の降臨派と救済派の間の内紛で殺害された。山杉恵子はノーベル医学生理学賞を受賞した脳科学者であり、その正体も地球三体協会のメンバーである。地球三体協会の最後のメンバーとして、彼女が自分の夫のビル・ハインズの戦略計画の意図を三体人に暴くという任務を持っている。自分の役目を果たした後、彼女は自決した。

興味深いのは、申玉菲と山杉恵子はいずれも知識のあるインテリであり、それと同時に地球反乱軍・三体協会のメンバーでもある。彼女たちは三体文明の侵入事業に自分の命を捧げ、自分の家族、そして全人類を裏切ったとも言える。『三体』三部作において、「僕は螢になります」という遺書を書いた特攻隊員も登場した。その特攻隊員は第二次世界大戦末期に神風攻撃を行った日本帝国陸軍航空隊特別攻撃隊に所属している。申玉菲、山杉恵子、特攻隊員はいずれも献身精神を持っている日本人であり、その集団主義が見られる。

それに対して、井上宏一のように、集団の存亡より個人の自由と権利を重視するキャラクターもいる。井上宏一は日本の防衛大臣であり、面壁者・タイラーの神風特攻隊を復活させるという提案に強く反対した。井上宏一の考えによると、特攻隊を復活させることが現代社会の基本的な道德規範に反している。人間の命が最も重要で、国家と政府はいかなる個人に対しても、死を前提にした任務を強要できない。集団の存亡より、井上宏一は個人の自由と権利を重視している。彼は第二次世界大戦後日本に広がった民主主義と自由主義の思想を代表していると考えられる。

『三体』三部作に登場した日本人がこうした多様なイメージを持っている。まず日本人は文化水準が高く、数多くのノーベル賞受賞者がいる。さらに、集団と個人の対立関係において、申玉菲と山杉恵子のように集団のために自分の命を捧げることができる日本人もいれば、井上宏一のように集団の存亡より個人の自由と権利を重視する日本人もいる。

(三) 日本文化のイメージ

『三体』三部作において、和風庭園、和服、茶道、剣術などの日本文化もよく言及されている。本節では、特に茶道と剣術を考察したいと考える。以下は、茶道と剣術が出た場面を引用したものである。

(3) 智子は着物の袖から袱紗をとりだすと、茶道具を清めはじめた。まず、精巧につくられた柄の長い竹の柄杓を拭いたあと、つづけて白磁と黄銅の茶碗を軽く拭った。それからたけの柄杓で水指の水をすくって茶釜に入れ、銅製の涼炉に置いて温めた。つづいて、白磁の小さな茶器から細挽きの抹茶を茶碗に入れ、竹の茶筌をまわしてかき混ぜる(中略)この時間の中では、血

や火にまみれた歴史は消え失せ、俗世もどこか彼方に去り、ただ白い雲と、竹林と、茶の香りだけがある。これはまさに、日本の茶道における四つの心得を示す「和敬清寂」の世界だった。

(4) 宇宙の闘技場で羅輯が体験したのは、戦いというより舞に似た華麗な動きの中国剣術でも、剣士の鮮やかな技倆を見せるのが目的の西洋剣術でもなく、一撃必殺の日本の剣術だった。(中略)このとき、剣客の剣は、手ではなく心に握られている。目を通して視線へと変化した心の剣は、敵の魂の深みまで刺し貫く。真の勝者が決まるのはこのプロセスだ。二人の剣客のあいだで静止した沈黙の中、魂の剣は音のない雷鳴のもと、突き、かわし、斬る。最初の一撃が加わる前に、勝敗と生死はすでに決まっている。

(劉慈欣『三体Ⅲ 死神永生』上190、191、235ページ)

(3) は三体世界大使智子が初めて程心に会い、お茶で彼女をもてなす場面である。劉慈欣は、智子がお茶を点てる過程を詳しく描写することで、茶道世界の美を書き尽くした。注意されるのは、茶会でお茶を味わう時、程心は智子が異星人の侵略者であること、四光年も離れた強大な異星文明に操られていることをすっかり忘れ、ただ茶道の「和敬清寂」の世界に入り込んだことである。韓立紅氏は日本の茶会について「会衆のすべてが茶道の世界のルールに従うことによって、現実世界の制約を脱し、心から打ち解けることのできる場」と述べている⁽¹⁰⁾。智子はこの茶会を利用して、執剣者候補の程心のことを知りたかったのではないか。執剣者は重力波送信システムのスイッチを握っている人間であり、ボタンを押すことによって地球文明と三体文明を壊滅することができる。つまり、二つの世界の運命が執剣者の手に委ねられている。この茶会を通して、智子、あるいはその背後の三体人が程心の弱さを見抜いてしまった。程心が第二代の執剣者に選ばれると、十分間でボタンを押すという決断を下すことができないのだ。この茶会は程心の心を探る絶好の機会だ。

(4) は第一代執剣者・羅輯が宇宙の闘技場で体験した戦いの場面である。二つの世界を壊滅することができるボタンというより、羅輯がまるで日本刀を持っているようだ。そのボタンは地球を守る最後の武器であり、それを押す前に勝敗と

(10) 韓立紅. 日本文化概论. 南开大学出版社, 2018年, 第三版, 252頁。

生死はすでに決まっている。劉慈欣が宇宙の闘技場で羅輯の体験した戦いを一撃必殺の日本の剣術にたとえたのは決して偶然ではないと考える。この戦い方は羅輯が選んだのではなく、三体人が人類に与えた唯一の生存のチャンスだ。

『三体』三部作に取り上げられた和風庭園、和服、茶道、剣術などの日本文化が非常に独特で、格調高い雰囲気が漂っている。しかし、こうした日本文化はいつも智子をはじめとする三体人に好まれ、地球上の生活に取り入れるという特徴を持っている。三体人はなぜ特に日本文化が気に入るのだろうか。三体文明と日本との間にはどのような関係があるのだろうか。それは次の部分において考察したいと考える。

二、メタファーの視点から見た日本的要素

『三体』三部作における日本のイメージを考察する時、日本国、日本人、日本文化のような小説の中で直接的に描かれたもののほかに、メタファーという視点から日本的要素をアプローチする必要もあると考える。本章は三体文明と日本との関係、智子のイメージに注目し、こうした異星人の設定から日本的要素を考察したいと考える。

(一) 三体文明と日本

三体文明は地球から四光年を離れ、三つの太陽を持つ惑星に誕生した地球外文明である。三つの太陽は三体世界の自然構造の基礎であり、その軌道が予測できず、苛酷すぎる自然環境をもたらした。気候の激変により、三体文明は滅亡と勃興を何度も繰り返し、三体人は「脱水」することで灼熱地獄や極寒の闇をやり過ごした。太陽の運行法則を見つけるために、三体人は二百サイクルもの文明にわたって努力し続けた。ところが、三体問題は解がない。三体世界では太陽の運行規則は予測不可能で、三つの太陽に呑み込まれ滅亡することが運命づけられていた。三体文明にとって、唯一の道は宇宙で新たな故郷を見つけることである。葉文潔のメッセージを受信した後、三体文明はすぐに太陽系に向けて巨大な侵略艦隊を送り出した。

滅亡の危機に瀕している三体文明は生存を第一欲求、他のすべての前提にしている。三体問題の解決と新たな故郷を見つけるために、三体人は刻一刻自分の科

学技術を発展させ、地球文明より圧倒的な技術力を持っている。生き延びるために、三体文明は極端な専制制度を採用し、個人はまったく尊重されないのみならず、役に立たない者は生きていけない。三体文明には文学も芸術も、美の追求も娯楽もない。三体人は全ての感情を排除し、必要な精神は冷静さと無感覚だけで、単調で枯渇した精神生活を送っている。三体人にも愛があるが、芽生えたばかりの時点で抑圧された。

三体文明をみたら、第二次世界大戦中の日本を思い出すにはいられない。日本は地震、津波、火山噴火などの自然災害が多く、人口の多いのに対して資源が少なく、自然環境は豊かであるとは言えないと考える。二十世紀前半、日本は国内の矛盾の解消と領土の拡大のために侵略戦争を起こした。当時の日本は明治維新により、中国や朝鮮などの隣国より圧倒的な技術力を持っていた。極端な専制制度を採用し、天皇個人に権力を集めていた。普通の日本人も戦場に出なければならない、戦争に苦しめられていた。戦時中、日本政府は大量の文学作品の出版を禁止し、人々の精神生活を単調にさせた。このように比較してみると、三体文明はまるであらゆる特徴が宇宙級のビッグスケールに拡大された日本のようである。劉慈欣がこのような三体文明を創り出したのも、かつての戦争中の悪魔、侵略者としての日本のイメージを強調したかったのではないだろうか。

(二) 智子のイメージ

智子(ソフォン)は元々三体世界から送り込まれたスーパーコンピュータである。十一次元の陽子を改造したもので、原子よりも小さい。智子は人類科学の基礎研究を妨害できるのみならず、量子もつれ効果を利用した即時通信により、地球文明の情報をリアルタイムで三体世界に送ることができる。三体文明は執劍者・羅輯の脅迫に屈し、地球文明との間に相互確証破壊に基づく暗黒森林抑止が成立した。太陽系侵略を一時中止した後、両文明の間にはようやく平和が訪れた。その時、人類文明の最先端に行くAIと生体工学の粋を合わせてつくられた女性型ロボット・智子が誕生した。彼女は複数のソフォンに制御され、三体世界大使の役割を果たしている。注目されるのは、女性型ロボット・智子のイメージが時間とともに変わりつつあることである。

暗黒森林抑止の時、智子はその名の通り、よく和服を着ている美しい日本人女性として人々の前に現れ、人畜無害に見えた。暗黒森林抑止終了後、智子は着物

ではなく砂漠迷彩服をまとい、長い刀を背負っている忍者のような雄々しく勇ましい姿で現れた。この時の智子は残酷で非情な侵略者であり、人類文明と手を携えて新しい時代に入ると言いながら、長い時間をかけて練り上げてきた人類絶滅計画を展開した。ところが、三体文明が高等文明に滅ぼされた後、再び姿を現した智子は迷彩服を着た忍者姿ではなく、優しくて美しい日本人女性に戻っている。人類に三体文明滅亡のいきさつを語っていた彼女は、表情や声がとても冷静であった。自分の種属の全滅という悲劇に直面しながら、威厳と気高さを保ち続けていた。太陽系が滅亡した後、小宇宙で程心と再会した智子は依然として和服姿で、美しく強く生きていた。そして、程心と共に大宇宙に回帰することを選んだ智子は豪華な和装をやめて、ふたたび迷彩服姿の敏捷な戦士に変身した。日本刀も含むありとあらゆる種類の武器を身につけ、闘志がみなぎる戦士として人類の友人を守っている。

以上のように、智子のイメージが物語の展開とともに変わりつつあるが、その外見は和服姿と忍者姿の二種類しかない。和服と忍者はいずれも典型的な日本文化の代表であり、つまり、三体世界大使の智子がずっと日本人の姿で人々の前で現れている。それどころか、物語の展開とともに生じた智子のイメージの変化も、現実世界の日本と一々対応できると考えられる。戦前は人畜無害であったが、戦時は非常に残酷で非情だった。智子の言及した「二つの文明の新しい時代」は、太平洋戦争における日本の「大東亜共栄圏」構想に通じているのではないか。高等文明の打撃を受けて壊滅した三体世界は、第二次世界大戦で米国の核攻撃を受けた日本のようなのだ。さらに、程心と共に大宇宙に回帰することを選び、闘志のみなぎる智子も、戦後の不況を粘り強く乗り越え、過去の敵と手を携えて再出発した日本と同じだ。三体世界大使としての智子は三体文明の意志を代表している。彼女のイメージの転換から、三体文明と日本とのつながりを垣間見ることができる。つまり、日本がまさに異星文明・三体文明の原型であると考えられる。

三、イメージの原因分析

本章は『三体』三部作で直接描かれた日本のイメージと異星人の設定から見られる日本的要素に基づき、そうした日本が描かれた原因を分析したいと考える。ここでは世界を題材とするSF創作意識、現実世界の影響、作者の想像力の乏し

さという三つの原因が挙げられる。

(一) 世界を題材とするSF創作意識

劉慈欣はSF小説に描かれる危機がほとんど人類全体の問題で、国家の範疇を超えるものだと指摘した。彼は「中国人の立場ではなく、地球人の立場で書いている」⁽¹¹⁾と自白した。従って、日本を人類全体の一部と見なして考え、想像するのも当たり前だと考えられる。『三体』三部作は劉慈欣が行った壮大な「思考の実験」ともいえるだろう。彼が気にしていたのは、人類全体が存亡の危機に直面した際、どのような変化が起こるかということである。国際会議で積極的に自分の意見を述べた日本代表でも、程心と共に大宇宙に回帰することを選んだ智子でも、こうした日本的要素には劉慈欣の人類運命共同体意識が見られると考えられる。

(二) 現実世界の影響

劉慈欣は以前から、「SFによって現実を隠喩的に反映したいのではなく、SFを書くこと自体が目的なのだ」⁽¹²⁾と、こうした政治的読解を常に拒否した。それに対し、福嶋亮大氏は「そもそも中国の作家にとっては、作中に政治的暗号を込めること——いわゆる「微言大義」や「春秋の筆法」——はお手の物であり、作家の発言をすべて額面通りに受け取る必要もない」⁽¹³⁾と述べている。筆者が『三体』三部作における日本のイメージを考察することによって、劉慈欣の創作は確かに現実世界の影響を受けたという結論を出したいと考える。まず、『三体』三部作に登場した先進国日本のイメージが現実と一致している。日本は確かに政治、経済、文化、科学技術などの各方面で高い水準を持っている先進国である。さらに、人類と正面対決した唯一の侵略者として登場した三体文明と戦後強く生きている智子も日本と各々対応することができ、現実的な根拠があると考えられる。筆者の考えによると、確かに劉慈欣はSFによって現実を隠喩的に反映しようとしたのではないが、智子というキャラクターを作るとき、現実の影響を受けたことは間違いない。そもそも智子が日本人の姿で小説に登場するのも尋常ではないことであり、侵略された歴史を提示したいのではないだろうか。

(11) 劉慈欣、蓋暁星、コロナショックと『三体』。Voice, (514)。

(12) 劉慈欣、《三体》不是里程碑。科学日报, 20111217。

(13) 福嶋亮大、文化史における『三体』。群像, 74 (11)。

(三) 想像力の乏しさ

『三体』三部作は宇宙を舞台としている空想科学小説である。冒険心の強い空想家として、劉慈欣は早くから遙か彼方の銀河系や宇宙の果てへ想像の羽を広げている。ところが、ここで注目したいのは侵略者に対する想像である。この人類と三体文明の対決から宇宙の終焉までを描いているビッグ・スケールな物語に登場した侵略者が日本人の姿をしている。これは実に普通ではないと考えられる。なぜ智子は中国人、アメリカ人、ロシア人、インド人ではなく、よりによって日本人の姿をしているのか。やはり想像には限界があるのではないだろうか。劉慈欣は、SF文学には直感に由来した考えが多いと語った⁽¹⁴⁾。典型的なキャラクターが根拠なく創造されたのではなく、現実世界には何かの原型があると考えられる。日本を原型にして三体文明を書いたのは、中国人の劉慈欣が第二次世界大戦で日本に侵略された歴史を胸に刻み込んでいるからだと考えられる。従って、侵略者のイメージを作る際、日本しか思い浮かべなかったのではないだろうか。そこには劉慈欣の想像力の乏しさが見えると考える。

おわりに

以上は『三体』三部作で直接描かれた日本のイメージ、そして異星人の設定から見られる日本的要素を分析することによって、そうした日本が描かれた原因を考察した。『三体』三部作において、日本は現実と同じく高度な科学技術と独特な文化を持つ大国であり、国際的に発言権も持っている。メタファーという視点から三体文明と智子のイメージを分析すると、日本はまさに三体文明の原型であることが明らかになった。そうしたイメージが作られた原因には、世界を題材とするSF創作意識、現実世界の影響、作者の想像力の乏しさなどが挙げられる。

本論文は『三体』三部作における日本のイメージを分析したが、人類と正面对決した唯一の侵略者として登場した「智子」という複雑なキャラクターに注目し、詳しく分析する必要があると考える。中国人の未来的想像力を凝縮している智子というキャラクターが一体どのように作られたのか、現実には原型となる人が存在しているのか、それを解明することが今後の課題になると考える。

(14) 劉慈欣. 我眼中的当代中国文学. 科技日报, 20130518.

参考文献

- 大森望. 文革の不条理が原点の中国SF——劉慈欣『三体』現象. 新潮, 116 (10)。
严锋. 追寻“造物主的活儿”——刘慈欣的科幻世界. 书城, 2009 (2)。
福嶋亮大. 文化史における『三体』. 群像, 74 (11)。
仲俣暁生. ナショナリズムを超えた人類愛の物語 劉慈欣『三体II 黑暗森林』(上・下). 出版人・
広告人, 8 (8)。
王瑶. 全球化時代の民族寓言——当代中国科幻中的文化政治. 中国比较文学, 100 (03)。
张未未. 科幻式的异文化表达——《三体》的文学人类学解读. 美与时代 (下), 654 (05)。
李小叶. 中国想象与未来视野: [硕士学位论文]. 海南大学, 2016年。
富岡幸一郎, 藤井聡, 柴山桂太, 浜崎洋介, 川端祐一郎. 「中華未来主義」文学座談会 現代中国
の「想像力」を読む 劉慈欣『三体』をめぐって. 表現者クライテリオン, (12)。
須藤靖. 中国と三体世界——注文の多い雑文 その五十一. UP, 49 (9)。
韩立红. 日本文化概论. 南开大学出版社, 2018年。
劉慈欣, 蓋暁星. コロナショックと『三体』. Voice, (514)。
刘慈欣. 《三体》不是里程碑. 科学日报, 20111217。
刘慈欣. 我眼中的当代中国文学. 科技日报, 20130518。